

ことで、今後の興味がこの辺にくるものと思います。

演題7 上顎骨にみられた巨大な転移性腫瘍について

○佐島三重子, 武田泰典, 鈴木鍾美
都築文男*, 野坂洋一郎*, 金沢重俊**
岩淵憲次郎**

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

同 口腔解剖学第一講座*

水沢市 ときわ病院**

口腔領域への転移性腫瘍は稀であり、顎骨への転移は口腔領域への悪性腫瘍のうち約1%と報告されている。演者らは昭和55年度本学歯学部解剖実習屍体において、上顎に巨大な腫瘍がみられ、臨床的に上顎原発腫瘍が疑われ、組織学的に副腎皮質癌の転移と考えられた症例を経験したので報告する。

症例は49才、男性。27才時、脳出血の既往があり、以来左不全麻痺となっていた。昭和55年4月23日左腰部痛および左顎関節痛を訴え、水沢市ときわ木病院に入院した。入院時、全身のいそがみられ、左上顎部に鶏卵大の腫瘍がみとめられた。血液および尿検査一般で異常なく、またレ線上で腰椎、骨盤骨には異常はなかった。2カ月後、胸部レ線にて左下肺野に陰影がみられ、頸部および腋窩リンパ節などに腫瘍を触れるようになった。生検は患者の巨否により実施不能で確足診断が得られないまま、8月にいたり意識不明状態となり、9月1日死亡した。臨床診断：左上顎腫瘍の疑い。

剖検時、腫瘍は左上顎、両側副腎、腎臓、肺、肝、胸椎、皮膚およびリンパ節にみられ、とくに上顎と副

腎の腫瘍は最も大きく手拳大であった。上顎腫瘍は副蓋窩におよび脳実質を圧迫し、副腎は腫瘍により置換されていた。

組織学的に腫瘍はいずれの部位のものも、類円形ないし多角形で好酸性の胞体をもつ腫瘍細胞が、島状、梁状および腺管状に配列して増殖する中等度分化型の腺癌であった。特殊染色では上顎部および副腎部腫瘍はPAS陽性、さらに副腎を置換していた腫瘍はフォンタナ・マッソン、オイルレッドOにも陽性を示した。組織学および特殊染色の結果からも上顎部の腫瘍は、上顎原発の腺癌とは考え難く、副腎皮質原発の腺癌およびその上顎部への転移と考えた。

演者らが文献を渉瀛し得たかぎりでは副腎皮質癌が顎骨へ転移した報告は、本症例が最初のものと思われる。

質 問：伊藤 忠信（歯薬理）

1. 全身転移が多数見られたことから、臨床的にホルモン作用による変化は観察されなかったか。
2. 一般に未分化の時にはホルモン作用による臨床症状は発現しないものなのか。

回 答：佐島三重子（口病理）

1. 本症例は臨床的に、高血圧や女性化などのホルモン産生能はみられませんでした。内分泌腫瘍は考えられていなかったため尿中のホルマリン検査などはおこなわれておりません。
2. 副腎皮質癌において組織学的に未分化なものは内分泌非活性癌であることが多いという報告があります。しかし内分泌腫瘍のみならず一般的な腫瘍においても個々の細胞が分泌機能をもっている全体としてそれが臨床的に発現しないことがしばしばみられます。